

平成30年10月31日(水)

神田神保町『兵六』

学生時代に、神田神保町の『兵六』という酒場に生意気ながら友人たちと数回通ったことがある。

司馬遼太郎の『街道をゆく』には、「神保町の古書が焼失することは、文化的に極めて大きな損失である」として、この一帯のみアメリカ軍が空襲を避けたという記述があるが、神保町は街全体が知的財産とも言える由緒正しき街で、その中に三省堂の裏手、ミロンガというお店の近くに一軒の酒場があり、頑固そうなおじさんが一人座っていた。

兵六の初代店主平山一郎氏は、鹿児島に生まれたという。後年、上海に渡り東亜同文書院に入学、諸氏と交遊し、かの魯迅とも邂逅していたそうだ。

頭上には、煙草の煙ですっかりセピア色になった色紙があった。初代が定めた「兵六四戒」という決まりである。

「他座献酬 大声歌唱 座外問答 乱酔暴論」

他の席の人にお酌をしない。大声で歌わない。他の席の人と議論しない。酔って暴論を吐かない。

周りにずらりと並ぶ色紙の中に一つ、印象的なものがあり、今もその句を覚えている。

「秋が来て/友の差入れてくれた/林檎一つ掌(てのひら)にのせると/地球のように/重い」

思想犯として投獄された、詩人・壺井繁治が獄中で詠んだ詩だという。林檎の字が少し間違っているがそのまま書き残したと聞いたことがある。

日本酒を飲みすぎて怒られ、若い者は芋焼酎を飲めと芋焼酎の爛酒を飲み進めるうち腰が抜けた苦い思い出がある。夢の中でも世界が回って、3日間は何も食べれなかった。

重き<sup>まし</sup>地球のごとし<sup>りんご</sup>林檎かざす夜 逆熊